「日々の理科」（第 3249 号）　2023,-6,29

「24 年前のワープロ復活（４）」

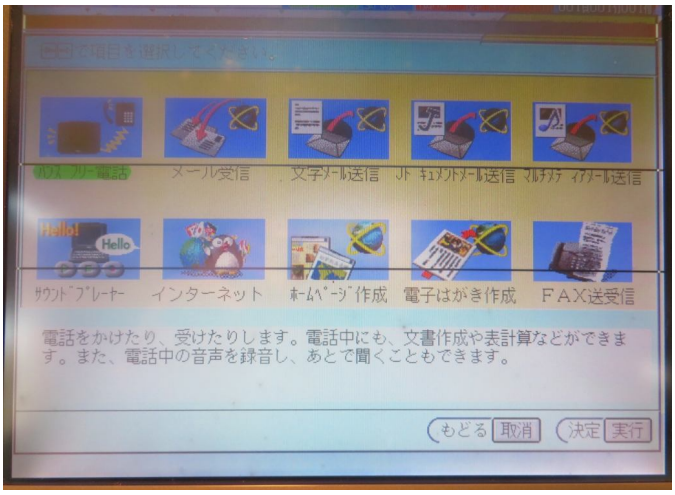
お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス＆エデュケーション研究所 研究員

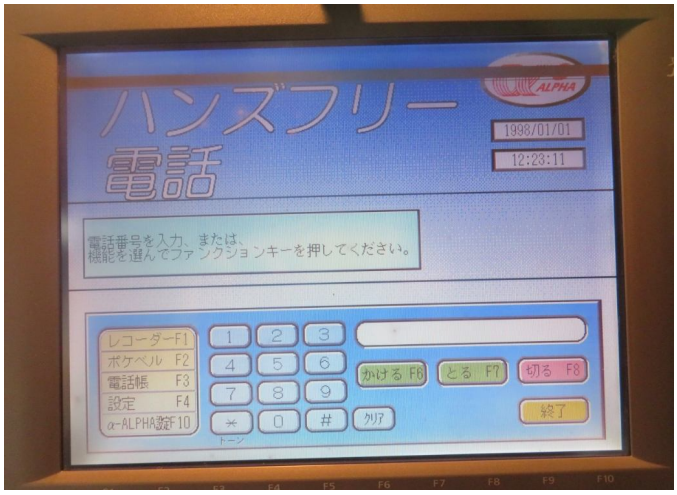
田中　千尋　Chihiro Tanaka

ワープロは本来、文書を制作して印刷することが目的で開発された。それ以前は「ガリ版印刷」か「和文タイプ」というものが主流で、小学校の事務室でも事務職員の方が毎日依頼された文書を「和文タイプ」で打っていた。

しかし平成に入って、ワープロは各社の開発競争になり、文書作成の利便性よりも「いかに多くの機能を付加するか」という方向に進化してしまった。この「文豪ミニ」など、その最たる機種だろう。その証拠に「マルチメディア」なるキーが、最も良い位置についている。もちろん押してみた。

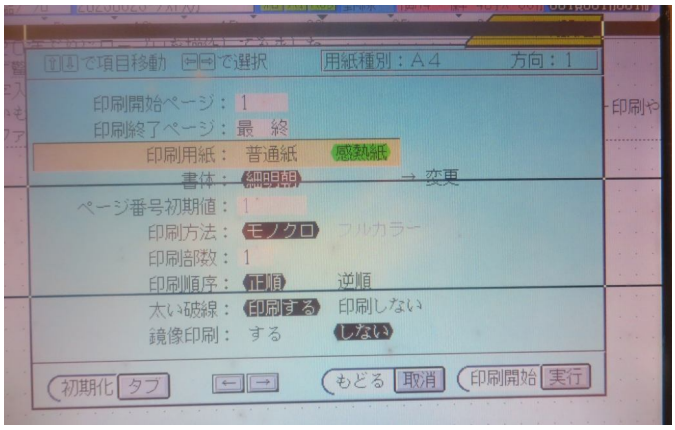


ズラリと大きなアイコンが表示された。メール送受信、電話の音声通話、サウンドプレーや、インターネットなどの機能だ。「ホームページ作成」というのもある。そういえば、私が初めて制作した個人ホームページはこのワープロで作り、ダイヤルアップでサーバーにアップしたものである。



ハンズフリー通話という機能もよく使った。これは今でもちょっと重宝しそうなので、試してみたい。

カラー印刷には専用のインクリボンが必要だが、モノクロ印刷は感熱紙にもできる。本体下部のトレイには、当時入れた感熱紙もそのまま入っていた。



印刷設定をして実行すると、印刷の稼働音はしたが、印刷はできなかった。感熱紙が古すぎたか、紙送りのローラーに問題があるようだ。しかし、この印刷機能さえ正常なら、「完動（感動）品」ということになる。幸い今の職場のメカに詳しい人がいるので、ちょっと見てもらって、日常的に使ってみようと思った。